

二度目の恋を・・

palareru

「もう終わりにしよう・・・」、

そう言って、俺の手を離したあいつは  
涙も見せずに笑って

「じゃあね・・・」、

あっさりと背中を向けた。

卒業式の後の打ち上げで、結構な量の  
酒が入っていたとはいえ

「うそだろ?・・・」、

あの時の事は、鮮明に覚えている。

「明日からの休みは、少し遠出をしないか?」、

そう言って、飲み会の後、その手を引いて  
俺の部屋に連れてくるつもりだった。

父さんから車も借りてあった。

部屋に着いたら、渡したい物もあったのに・・・。

あいつは、振り返らなかった。



眠れなくて、水さえも喉を通らなくて  
明るくなった窓を見つめていた俺は立ち上がり  
バスルームに向かった。

酒臭いワイシャツを洗濯機に投げ入れ

勢いよくシャワーをぼけた頭に押し付けた。

真っ白なシャツに、あいつが選んでくれた  
ジャケットを羽織って、俺は部屋を飛び出し  
大学を挟んで反対側の街に向かった。

そんなつもりで借りたんじゃない父さんの  
車の中には、あいつの好きな音楽が流れてて

「僕これ好きなんだ!」、

ニッコリ笑う姿を見るはずだった。

なのに、隣に座ることもなく

「勝手に終わりにするなよ・・・」、

俺はアクセルを踏み込んだ。

「嘘だろ？」、

見慣れた景色の中に立つ、そのアパートの  
2階の窓には、カーテンが無くて

入り口のポストにも、駆け上がって叩いた  
そのドアにも、もう、あいつの名前は無かった。

「引っ越しましたけど」、

あまりの煩さに出てきた隣の学生が、文句を  
言いたそうに睨みつける。

「いつですか？どこに？」、

詰め寄った俺の手を払いのけて

「知らねーよ、先月ごろからいねーし」、

そう言った学生は、部屋の中に入ってしまった。

「せんげつ？・・・」、

俺はその場に崩れ落ちた。

あいつの携帯は、もう繋がらなくて  
聞いていたはずの実家も、詳しい事は  
知らなくて

「どうして教えて貰えないんですか？」、

事務室の職員は、最後まで個人情報だから  
教えられないと言って、俺を追い返した。

俺以外にも・・・

そう思って仲間を探したけれど

「渡辺以外に友達、いたのか？」、

「苗字は知ってるけど・・・」、

「お前が知らないのに・・・」、

俺以外に、友達らしい仲間も、同じ  
高校から来た奴さえも、独りも居なかつ  
た。

不動産屋も、大家さんも、全てが俺の  
事をストーカーでも見るような、そんな  
対応で・・・

「君だけには、教えないでと言われて  
いるんだよ・・・」、

大家さんの旦那さんが、奥さんに聞こえないように教えてくれた。

眠れないまま、数日が過ぎた。

自分の荷物もほとんど片付いて、あとは就職先のアパートに引っ越すだけ。

壁に残っているカレンダーをぼんやりと見ていると、携帯が震えた。

”入社式について”

そう送られてきたのは、この春から俺が務める会社の人事課からのLINEだった。

「やったよ！！」、

あいつは、携帯を握りしめてぽろぽろと涙を流した。

4年の春。

あっとゆう間に、内内定を取った俺の就職先に、何度も何度もチャレンジをして最終募集で、見事に内定を取った。

「これで、ずっと一緒にいれるね」、

そう言って、本当に嬉しそうになっこり笑って俺の腕の中で泣いたのに、



「辞退した？」

入社式の受付にいた、人事担当者から聞かされてその言葉の意味が分からなくて

「なんで・・・」、

ずっと、オリエンテーションで面倒を見てくれていた担当の春日さんに詰め寄ると

「個人情報だから言えないけど、年が変わって直ぐだったかな、電話があってね・・・」、

騒がしい受付のそばを離れるように、俺に目くばせをして、春日さんは電話を掛ける振りをしながら歩き出し

「病気が分かって、治療に専念するからとだから、大学の仲間にも内緒にしてくれとお願いされたのよ・・・」、

電話に話しかける振りをしながら、そう教えてくれた。

「私さ、ほらこれだから月に一度病院に行くんだけど、2月に検診に行ったときに彼を、見かけて・・・」、

「ど、どこですか？」、

思わず大きな声を出した俺の足を、春日さんは思いっきり踏んで

「歓迎会の後ね」、

キッと、にらみを効かせてその場を離れていった。

入社式からの数日は、バタバタと時間が過ぎた。

歓迎会という案内がLINEで回って来たのは知っていたけれど、とても出れるような余裕はない部署に置かれている。

「新入社員代表の挨拶をするくらいだからこれ位は頑張ってもらわないとなあ〜」、

と、にやにやと新入社員イビリを始める先輩達との戦いはすでに始まっていて

「歓迎会に行くなら、終わらせないとな」、

そう言いながら、次の仕事を平気で机に置いていく。

同期入社の仲間が、気の毒そうに俺を見て頑張れっと、小さくガッツポーズをしてくれるから、出かかった文句を飲み込んで

「はい、頑張ります」、

俺はにっこり笑って、その書類を掴んだ。

たわいもない

自分でできるだろ！っと言いたくなるような  
簡単な添削と数量計算の確認。

むかついたから、内容を完璧に訂正して  
素晴らしい書類に変えて、（真っ赤に添削して  
新しいものも付け加えて）

ついでに上司に提出しておいた。

別室に呼び出された先輩達を横目に、仲間  
達と、歓迎会へと向かったのは言うまでもない。

新入社員全体の歓迎会だけあって、貸し切りのホテルのフロアーには、緊張している新人の他に書く部署の役職と、会社のお偉いさん達が混ざりイマイチ盛り上がれない静かな時間が過ぎていく。

「早く終わらないかな・・・」、

チラチラと携帯を見ている新入社員は、その上司に確実にチェックされているし

「君も、我が大学か・・・」、

既に、派閥に引き込まれる仲間も見えた。

「お、いたね!」、

ポンッと背中を叩かれて振り返ると、そこにいたのは、人事課の春日さんで

「あんまり飲むなよ、話が出来なくなる」、

にやっと笑って、名刺を渡し、すたすたと去っていった。

「あの人って、妊婦だよな・・・」、

横にいた仲間が、その後ろ姿を見送る。

多分、10センチ位あるピンヒールで、ウエストが締まったスーツ。

気持ち膨らんだお腹だけど、言われなければきっとわからない。

「いつ、生まれるんだっけ？」、

同じくその後姿を見つめていた俺の言葉に

「多分、来月だな・・・」、

いつの間にか横にいた紳士が答えた。

「・・・・・・・・」、

固まった俺達の視線に気が付いたその紳士は

「お腹が下がって来ているから、もしかしたら、今日あたり生まれたりしてな～」、

楽しそうに言ってグラスを揺らした。

名刺の裏にあった店についたのは深夜0時。

沖縄風の居酒屋で、店の看板はもう閉店の札を巻き付けられて消えていた。

カウンターにだけついた電気の下で、春日さんは、おにぎりをパクついていて

「あ、やっと来たね」、

ご飯粒のついた、手をひょいっとあげて自分の横に座れと俺を呼んだ。

「あんたもなんか食べなよ」、

そう言って渡されたのは、メニューではなく手書きのメモで

「これなら、材料があるってさ」、

春日さんは、奥の厨房を指さした。

厨房の奥に、うっすら見える煙草の煙と髭。

「旦那さんですか?」、

厨房に向かって頭を下げながら、春日さんの隣に腰を下ろすと

「は？、あたしの事幾つだと思ってる？」、

キッと、大きな瞳が睨みつけて

「親だよ、親！」、

もう一つのおにぎりにかぶりついた。



「でさ、この間の続きだけどさ」、

味噌汁を飲みながら俺を見た春日さんは  
あいつの話の続きを始めた。

「結構でかい総合病院だからさ、ちょい  
気になって、あの子の行き先を見てたわけ  
そしたら、睡眠内科っていう新しくでき  
た待合に入っていったんだよね。

もっとほら、癌とか、ほら、命に係わる  
病気で、辞退したのかと思っていたから  
なおさら気になってさあ、会計待ってる間  
その子が出てくるのを張ってみた訳。

で、診察を終えたあの子がさあ、また  
偶然で、私の隣に座ったのよ。

これはもう、聞いて言いよって、神様の  
ご示しだと思うでしょ？

だから、聞いてみたの、」、

春日さんは、また味噌汁を飲んだ。

「どんな病気なんですか？」、

待ちきれない俺が、声を上げると

「煩いなあ、お腹の子がびっくりしたわ」、

春日さんは、すりすりとお腹を撫でて

「辛いんだってさ・・・」、

じっと俺の眼を見た。

「睡眠障害ってのは、辛いんだってさ」、

じっと俺の眼を見ながら、そう言った春日さんは、また味噌汁を飲んで

「同じ大学の仲間って事だけじゃ無いんでしょ？、彼とは？」、

今度は、そこに箸をおいた。

「……」、

言いたくても、言えない・言えない様な関係だったこと・

アイツが悩んで、独りで結論を出したのはきっと、同じ会社で、こんな事を聞かれる日が来ることをわかっていたから・

大学生活とは違う世界を

一人先に、考えてしまったから

何も考えずに、ただふたりでいられる事ばかりを喜んでいた俺には、思いもよらなかった事。

「彼は、凄いね・本当に君の事を大切に

思っていたからこそその、辞退だったんだね」、

今頃、そんなことに気が付いたのかと  
春日さんの視線は冷たかった。

「詳しい事は聞けなかったけどさ」、

親だと言った奥の人に向かってお握りの追加を告げた春日さんは

「大事そうに、胸元に揺れる指輪を、無意識に触っていたからさ・・・」、

そう言いながら、俺の首元に細い指を伸ばして・・・

「おんなじだし・・・」、

緩めたネクタイの間隙に見えていた鎖を引き出し、その先のリングを確認した。

「俺が・・・贈ったものです・・・」、

そのあとの言葉は出なかった。

探し出すべきなのか

あいつの気持ちを思い、このまま・・

ぐるぐると気持ちがから回る。

「気になって、人事で彼の連絡先をさ  
ちょっと調べてみたのよ・・昨日ね・・」、

奥から運ばれてきた追加のお握りを、  
俺の前にスライドさせて、食べる顎で  
合図をしながら

「あの子、家族がいないって知ってた？」

春日さんの言葉に、掴んでいたお握りを  
沙羅の上に落とした俺に

「連絡先の住所は、施設。そして、消息  
不明だって言われたよ」、

春日さんは追い打ちをかけた。

「日本海に見える田舎で育ったんだ」、

「口数の少ない父さんと、お花が好きな  
母さんと、弟が二人、妹が二人、大家族  
なんだよ～」、

「しっかり働いて、仕送りをするんだ」、

「いつか、一緒にあの砂浜を歩きたいな」、

そう言って、俺の腕の中で笑っていたのに

俺の知っているアイツは

本当のアイツではなかった？

春日さんは、ぽんぽん！っと、俺の背中を  
叩いた。

頭が痛い。

今までに経験したことの無い激痛だ。

何度も何度も、何かで殴られている様な  
そんな激痛が走る。

なんで・・・

なにが・・・

ふっと、我に返り、その激痛の方向に  
向かって、しっかりと眼を開けると、今、  
まさに、俺の頭に向かって、何かが落ちて  
来るところで

「ぐああ！」、

キャッチしたのは、人間のかかと！

それも、女の人で、思わず跳ね起きて、  
それを確認すると

「ば・・・か、遅いんだよ・・・」、

そこには、汗だくになって唸っている



「か、春日さん?」、

驚いた俺の横は、びしょびしょに濡れていて、良く見れば血だらけになっている。

「ええ???!!」、

飛び起きた俺は、見たこともない部屋の大きなベッドの上において、その横で唸っている春日さんはTシャツで・・

「救急車・・呼んじゃったから・・」、

春日さんが唸りながら、そう言った時ピンポンピンポンピンポン! っと、何度もチャイムが鳴った。

慌てて玄関に向かおうとした俺に

「ばか!!、ぱんつ!!」、

春日さんの言葉に、自分を確認して・・

慌ててその場で自分の服を探して、そして玄関に走った。

「おめでとうございます、元気な男の子ですよ、お父さん!」、

救急隊の人が、子供を抱えて俺の眼に来た。

「男の子・・・」、

思わず受け取ってしまった俺に

「感染の恐れがありますから直ぐに病院に向かいましょう」、

目の前の春日さんはストレッチャーに乗せられて、俺の腕の中の赤ん坊は、外気に触れないケースに移された。

「お父さん、必要なものを持って、一緒に」、

そう言われて、目の前にあった春日さんの鞆と、入院用に用意されていたであろう大きいバッグと、机の上にあった鍵を持って・・・

見事に全てが、正解だったことが驚きだが

俺は、二人と一緒に救急車に飛び乗った。



救急隊の到着と同時に、頭が出てきていた  
為に、自宅出産となった春日さんの驚異的な  
とゆうか、神秘的な姿を目の当たりにしてし  
まった俺は、呆然としたまま、病室にいる。

手続きの書類を書くように言われたが、  
春日さんが淡々と自分でこなしている。

「お父さん、少しは何かしてあげないと」、

入れ替わり立ち代わりやってくる看護師  
さんに、言われてようやく

「あの、どこかに連絡とか・・・」、

やっと言葉が出たその時

ばん！！っと、病室のドアが開いて

「だから、仕事は休めって言っただろう！」、

そこに、見たことのある人が・・・

「え？・・・しゃ、社長？・・・」、

俺を見た社長と、春日さんと、三人で  
冷ややかな空気に包まれた。



「じいじだよ～」、

夕方になって病室にやってきた赤ちゃんに  
そう言って、目じりを下げているのが、俺の  
会社の社長で

「他人だよ！」、

それを遮って、赤ちゃんを奪ったのが、俺の  
会社の人事課長の春日さん。

「目元がお父さんに似てますね～」、

看護師さんにそう言われて、目じりを下げて  
いるのが、俺。

いや、俺はお父さんじゃないんですと、何度も  
訂正しようと思ったのだが、もうそんな事が言え  
る状況ではなくて

「君が、父親だったとはな・・・」、

社長までが、俺をそう思い込んでいる。

春日さんは、否定もせず、肯定もせず、腕の  
中の子供をとっても優しく見つめて

「この子の名前は、直輔だから・・・」、

驚く言葉を放った。

「な、なんであんなこと・・・」、

社長が帰ってから、俺は春日さんにその意味を聞くと

「だって、お父さんから一文字貰うのってかっこいいじゃない?」、

春日さんはとても嬉しそうに笑っている。

「は?、ちょっと待ってください!、俺いつお父さんになったんですか?」、

あまりにも突然な出来事に声を荒げた俺に

「だって、君が、あんなことするから生まれちゃったわけだしさあ~」、

春日さんはニヤリと笑い

「もしかして、覚えてない訳?」、

え?



までよ・・・

俺は、朝、春日さんの部屋で・・・

ベッドに寝てたよな・・・

で、春日さんは破水して・・・

俺、服を着てなかった・・・

「も・もしかして・・・」、

「妊婦だから無理はできないって言うのに、君はもう、酔っぱらってるから」、

そこまで言った春日さんの口を押えて

「す、すいませんでした！責任を取ります俺が、二人を、殺すところでした。」、

俺はベッドの上に飛び乗って土下座をした。

「しばらく会社を休むけど・・・」、

病室を出ようとした俺に春日さんが何かを言いかけた。

「なんですか？」、

振り返ってもう一度ベッドまで戻ると

「社長が親なのは誰も知らないからねそのつもりでいてよ・・・、あ、いたわ一人だけ、身内が・・・」、

当然、返事が出来ない俺に

「会社の1階に入ってるクリニックがあるでしょ？、あれ、社長の兄さんだから知ってるしね。いわゆる伯父ってやつ。」、

知ってる・・・

昨日の歓迎会の時に、俺達に予言していた、あの紳士だ。

「だから、生まれるって・・・」、

忠告を無視して暴拳におよんだ自分の下半身をじっと見つめていると

「なに？、その気になったの？」、

春日さんから、デコピンならぬ〇〇ピン  
が、そこにヒットして・・・

「ぐああ！」、

悶絶しているところに、コンコン！っと  
病室のドアを叩く音が響いた。

「仲良しなんですね～、年上の奥様って  
やっぱりいいもんですか？」、

真顔で聞いてくるのは、新生児を担当して  
いる先生で、いかにも若くて、イケメンで・・

「いや、先生なら年上じゃなくてもモテ  
まくりでしょ？」、

そう逆に、聞き返したら

「年下とか、タメとかって、なんかこう  
メンドクサイトいうか、なんというか・・」、

苦笑いをしながら頭を掻くイケメン先生に

「手のひらで転がしてほしいんだ～」、

春日さんがにやにやして

「そうなんですかね～」、

先生は、なんだか照れている。

「確かに恰好は付けなくていいですよね」

思わず、そう答えてしまった俺に

「そうなんですよね～、お父さん、是非  
お友達になってもらえませんか？色々と  
相談に乗ってもらえると嬉しいです！」、

イケメン先生は俺と固い握手をして

ラインのふるふるまでして

笑顔で病室を出て行った。

「今度こそ、帰りますね・・・」、

もう外は暗くなりかけている。

ものすごく長い1日を過ごした病室から  
やっと解放されるという気持ちと、そこに  
すやすやと眠る赤ん坊から離れたくないと  
いう複雑な気持ち。

「で？、また来るの？」、

ちょっと、真剣な顔になった春日さんが  
じっと俺を見つめて

「これから、部屋の掃除をして・・・  
何か要りますか？、急ぎが無ければ、また  
明日きます。」、

俺は、春日さんをそっと抱きしめて

「お疲れさまでした。  
素敵な天使とめぐり合わせてくれてありが  
とうございます。」、

おでこに、ちゅっとキスをした。



病院での週末を過ごし、眠い目を擦りながら出社すると

「おい、なにかやらかしたのか?」、

営業部長が、俺のデスクで仁王立ちしていて、その横には、課長と係長、主任がビクビクしながら並んでいる。

「え?はい?・・・」、

意味の分からない俺の手から鞆を奪いデスクに投げた部長は、今度は俺の腕を引いて歩き出す。

「早くしろ!社長がお呼びだ!」、

俺は役員専用のエレベーターの中に押し込められていた。

「嫌な予感がする・・・」、

昨日も半日、直輔にべったりだった社長が帰った後、春日さんがボソッと云った。



「まさか・・・クビですか?・・・」、

小さな声で、部長に聞くと

「逆だよ、逆!」、

チンッとなったエレベーターは最上階に到着して、背中を押されて俺はそのふわふわの絨毯の上に踏み出した。

「やられたな・・・」、

ベッドの上で、胡坐をかいて授乳をしている春日さんはとても悔しそうに舌打ちをした。

「私のハンコを飛ばすなんて!」、

ちらっと眼をやったのは1枚の紙きれ。

「そこですか?ハンコじゃなくて相談じゃないんですか?」、

ひらひらさせたのは、辞令と書かれた恐ろしい紙きれ。

高級なソファに座った会長と、奥の大きな椅子を回転させた社長の待っていた部屋に入ると、部長が俺を紹介した。

「この春入社しました渡辺です」、

言われて、俺は深く頭を下げた。

「君か・・・」、

低く響いた会長の声に、頭を挙げられないでいると、横を通り過ぎる女性の脚が見えて

「来なさい・・・」、

社長の声に頭を挙げると、女性から何かの紙を受け取る社長が、手招きをしていた。

恐る恐る、社長に近寄っていくと

「此方にどうぞ」、

女性が、会長の横に俺を立たせ

「辞令・渡辺大輔を秘書課勤務に命じる」

紙を受け取った部長が震える声で代読してびっくりして固まった俺の目の前にその辞令を突き出した。

「は・・・い?・・・」、

受け取れずに固まったままの俺に

「早く、受け取らんか!」、

小声の部長と、腕をつつく女性。

「は、はい！ありがとうございます」、

慌ててその辞令を受け取ると

「みっちり、仕込んでやるからな・・・」、

社長の低い声が聞こえた。

母子手帳の父親の欄に名前は無かった。

春日さんが直輔とすやすやと眠っている時にそっと確認したその手帳の中に、多分父親からだと思われる絵葉書が1枚だけ。

消印は、滲んでいる。

海外の何か所かを経由したスタンプ。

わずかにわかる日付は半年以上前。

もしかしたら、相手には言っていないのかもしれない。

春日さんの性格上、そんな気がして俺はそれ以上、父親の事を聞くつもりにはなれ無かった。

差出人の名前の無い絵葉書。

綺麗な夕日の中にあくびをする一匹の犬。

そして、今更ながら

春日 直            っと書いて

「すなお・・・って読むのか・・・」、

父親で、春日さんの愛する人だろう男の文字。

”愛する、すなおへ”

アイツの事を思い出す俺がいた。

6畳1Kの小さなアパート。

学生専用だから、十分なんだと言って  
小さなテーブルにお茶を入れてくれた。

「物が少ないな～」、

あたりを見回している俺に

「勉強できればそれでいいし、ここは  
寝るだけだから」、

アイツはそう言っていた。

ベッドの横に画鋏で留めてあったクリア  
ファイルの中には、1枚の写真が入っていて

”愛している、京介”

ボールペンで殴り書きされたような文字。

「生まれたばかりの僕なんだ・・・」、

アイツは、ちょっとだけ寂しそうに笑い  
壁から外して枕の下にしまい込んだ。

あの写真だけだったのか・・・

親の顔も知らずに生きてきたのか・・・

恵まれた家庭の中で育った俺には想像も  
付かない世界。

そして、目の前にも、父親の事を知らず  
に眠る天使と

きっと、教えないだろう女神。

俺はどうすべきなのか・・・

小さな手で俺の人差し指を握り締める  
その手を離すことが出来ずにいた。



何かと荷物だ、洗濯だと来ていたこの春日さんのマンションは、どう見ても恐ろしい金額だと思われる。

でも、うち（当社）の物件じゃないよなそう思って、ビルの名前を検索していると

「おい、元気か？」、

ぽん！と背中を叩かれて振り返ると

「えっと？・・・」、

どこかで見たことのあるような、無い様な不思議な感覚と・・・匂いがする。

「あ～・・・」、

その男性は、ゆっくりとサングラスを外しニヤリと笑って

「新米おとうさん？」、

髭を撫でながらからかうように、俺の肩をぐいと寄せて

「ちょっと寄っていきな」、

俺はそのまま、マンションの隣のビルにあるあの居酒屋に連れ込まれた。

あの日、春日さんはこの人の事を親だと言っていた。

社長が父親なら、この人は？

まさか、母親じゃないよな・・・

そんなことを考えていると、ドン！っと目の前のテーブルにジョッキが置かれ

「お祝いだ！」、

同じジョッキを、ぶつけてきたその店主は一気にビールを飲みほした。

「兄貴の下でこき使われてるんだって？」、

カウンターの中で仕込みを始めたその人は社長の弟で・・・

「直が、中学生の時に家出をしてからずっと俺が親代わりなのさ」、

聞きたいことに答えてくれた。

「自分でバイトをして高校を卒業してさ大学も就職も、一切、兄貴に頼らずに自力で切り開いてきたんだよ。すごい奴なんだ」、

てっきり親のコネで入った会社なのかと

思っていた俺に

「海外で実力を付けて、会長に呼び戻されたんだよ」、

居酒屋の店主から、親の顔に変わった男性は、得意げに笑って見せた。

「父親に心当たりはないんですか？」、

程よく回った酒の力を借りて、俺はマスターに、そう聞いた。

自分から、俺の事はマスターと呼べ！

酔っぱらった店主はそう言って、今日は休業だと、仕込んでいたいくつかの料理を持って、俺の前に座り込んでいた。

「海外にいるときの相手だろうな、日本に戻ってからは、まったくその毛がなかったんだ。でも、半年くらい前に、やたらと物を食べては吐いてたから、伯父に見て貰って妊娠しているのがわかったのさ、それまでは本人も全く気が付いていなかった。」、

俺は、あの絵葉書を思い出した。

「半年くらい前に、外国に行きませんでしたか？、春日さん」、

携帯のカレンダーをスライドしていると

「夏になる前に、休みを取ってたな・・・」、

マスターは、壁の飾りを指さして

「バリ島だよ・・・」、

そこにはあの絵葉書と同じ夕焼けがあった。



あれよあれよと、春日さんとその周囲の人達に流されて・・

気が付けば、俺は春日さんのマンションで暮らしている。

会社の寮には、週に一度、郵便物を確認に行っているようなもので、まあ、寮と言っても、アパート借り上げの寮なので、他の奴等との交流が無くても気が付かれてはいない様なので、（自分ではそう思っているが）

特に支障が無いのも、自分に都合が良い様に受け止めているのも事実なのだ。

俺の事を父親だと言いながらも、誰一人認知しろとか、春日さんと籍を入れろとかそういった事を言う人はいない。

言わせない様に、春日さんの睨みが効いているのかもしれないのだが、それにしても今の俺のこの生活はどうなんだろう。

「眠い・・」、

リビングで洗濯を畳んでいる俺の所に直輔を抱いた春日さんがやってきて

「ちょっと寝る・・次の授乳まで・・」、

ほい！っと直輔を俺に渡すと、その横のソファに横になり、秒で眠りに落ちた。

「おやすみ・・・」、

乾燥機から出したばかりのタオルケット  
をそっと腰にかけて、エアコンの温度を  
一度だけ上げて

「なお～、パパとおしゃんぽする?」、

俺は、大きな瞳で見つめる直輔を抱き  
部屋の鍵を挿んだ。

アイツと付き合い始めた時に、この腕の中にある幸せは諦めた。

アイツがそれを気にする事も、それを望んでいることも知っていたから。

確かに俺は子供が好きで、あの大学に進むまでは保育士になりたいと考えていた位だ。

でも、今の所、男性の保育士には色々な制限と、偏見があり、俺にはそれに立ち向かう勇気が無かった。

とりあえず、無難な大学に進学して無難に商社に就職した俺には、この手の中の宝物の存在は、とっても重くて・・・

正直、幸せだ。

アイツの事を考えない日は無いのにこの手の中のぬくもりを離せない自分を天秤にかけている日々に

どうしたらいいんだろうな・・・

マンションの下にある公園のブランコで揺れながら、俺は直輔に話しかける。

そんな俺の背中を、マンションの最上階



ベランダから、春日さんが見つめている事

マンションの隣の居酒屋から一服に出て  
来たマスターが見つめている事

そして、公園の反対側に、俺の探し続け  
ている優しい瞳が涙を流している事も

何一つ、知らずにいた。

「おはようございます。」、

その人は、ニッコリ笑うと慣れた手つきで  
俺からするりと直輔を奪うと

「行ってらっしゃいませ」、

そう言って、すたすたと奥の子供部屋に  
行ってしまった。

「あ〜・・・なおすけえ〜」、

そう言って、手を伸ばす俺の後ろ頭を  
すぱんっと、持っていた書類で殴った春日  
さんは

「毎朝、うるさい！行くよ！」、

とても産後2か月とは思えない抜群の  
スタイルと、美貌の春日さんは、相変わらず、  
10センチのヒールをカツカツと鳴ら  
して出発した。

俺は、いまだ慣れないネクタイに苦戦  
しながらその後を追いかけてエレベータ  
ーに、飛び乗って

「違うだろ！」、

ぐいっとネクタイを掴まれて、そのまま

卒園式の子供のように、ネクタイを直されている。

途中で乗り込んできたJKに、くすくすと笑われた。

マンションから駐車場に出たところで

「そろそろ、自分のアパートに帰りな」、

全く表情も変えず、俺の顔も見ずに春日さんはそう言って迎えの車に乗り込んで

「来たい時にはいつでも来れるだろ？」、

少し照れながらそう言った。

「渡辺、今日の資料だが・・・」、

「あ、はい、こちらに」、

「渡辺、これは・・・」、

「あ、はい、これでいなかでしょう」、

「渡辺さん、昨日の書類が・・・」、

「あ、はい、先ほど、入力しておきました」、

「渡辺!」、

「はい!」、

春日さんが家に帰れと言った意味が分かる。

研修期間の3か月を終えた俺は直輔に会いに行く気力が無くなるくらい、毎日がとても忙しく、いくら勉強しても、準備をしても時間が足りない。

もちろん、まだ秘書課の業務ができる程の力は無い。

与えられた計画と準備と、そして整理業務でてんてこ舞いで、この数カ月のぬるま湯に浸かっていた自分が情けない。

他人の人生を背負えるほどの器量も実力も無い俺に、直輔の父になれ、春日さんと一緒になれなんて言われるはずがなかったんだ。

悔しくて、自分にむかつて、それからの俺は、春日さんの事も直輔の事も・・・  
そして、アイツを探すことも・・・

まずは、自分に力を付けよう！

そう決めて、全てを心の奥底に封印した。

「あ、雪ですよ・・・」、

秘書課の窓から見える、薄暗い雲からはらはらと雪が舞い始めた。

女子社員たちは、ワイワイと喜んでいる。

「僕、寒いのが苦手なんだよね」、

そう言ったアイツは俺のポケットに自分の手を突っ込んできて

「へへへ・・・」、

嬉しそうに指を絡めた。

最初は、俺の顔を見ているくせに俺がその瞳を見ると、視線をそらしていたくせに、いつの間にか俺の横にいて、俺の事を暖かくして、俺を愛とゆうもので包んでくれていた。

沢山努力したんだよ・・・

僕を見て欲しかったんだ・・・

愛し合うたびに、

激しく揺れるたびに

嬉しいんだ・・・

そう言って涙を流していたアイツは

大学4年のあの日、はらはらと落ちてくる  
雪を見上げて何かを考えていた。

あの時、きっと

俺の前から姿を消すことを決めていた

俺の為・・・

そして自分の為と、言い聞かせて。

「渡辺さん、クリスマスは？」、

女子社員の視線が集中する。

「あ～待ってる奴が・・・」、

俺の言葉を最後まで聞かずに悲鳴が響いて・・・

「彼女いるんですかあああ！」、

「どんな、人ですか？」、

「社内ですか？」、

ぐるっと回りを囲まれてしまい

「薄情するまで、逃がしませんよ！」、

そこまで言われて、降参した俺は

「春日さんのお子さんとクリスマス会をする約束なんですよ・・・」、

嘘ではない本当の予定を公表したら



「……まじ？」、

「もしかして、噂の年下の彼氏って」、

「渡辺さん?!！」、

ぎゃ!!!っと、騒ぎ始めた女子社員に

「おいおい、俺も呼ばれてるんだけど?」、

いつの間にか秘書室に入ってきていた同期  
の加藤が顔を見せて

「イケメンの若い奴らは、みんな呼ばれて  
いるんだけど?」、

キラッ!っとウインクを飛ばして女子達の  
視線を総なめにした。

・・お前、気を付けろよ・・

通り過ぎざまに耳元で言われて、むにゅ!  
っと、お尻を掴まれた。

同期の加藤は、3か月の研修を海外で終わらせてきた優秀な奴だ。

春日さんの復帰と同じころに日本に戻ってきて、俺が最初にいた営業の1課にいる。

同い年とは思えない貫禄と語学と実力。

最初は、妬みの声が聞こえた物の1週間もしないうちに、実力で黙らせた凄い奴だ。

そんな加藤が、何故か俺に声を掛けて来て何故か毎日会いに来る。

たわいのない話しかしていないのだが、周囲から親友と言われている。

ただ・・・

「最近、男前な奴とちょいちょい来る」、

マスターから入るLINEの、春日さんの相手は多分、きっと、こいつだと・・・。

何故か聞けずにいる。

春日さんのクリスマスパーティーを仕切っていたのは、やはり加藤だった。

人事課、営業課、秘書課、総務課の新人で構成されたイケメン集団と、春日さんのお仲間のお姉さまたち。

そして、直輔と、お姉さま達のお子様達。

かなりのリスクを伴うコンパだと、こっそり言ってる奴もいたが、ていのいい子守りの様に思うのは俺だけだろうか。

まあ、子供は好きだから、だからかもしれないが、何故か俺の所にばかり子供が溜まる。

「だいしゅけ！」、

直輔を抱っこしている俺の背中に張り付き髪を引っ張り、ほっぺを突かれ・・・

「しっこ・・・」、

待て待て待て！っと、じたばたしている俺のてから加藤が直輔を受け取り

「こっちは任せろ」、

大事な宝物を奪われた。

割と男が嫌いで人見知りをする直輔が俺以外にご機嫌よく抱かれている姿は、正直面白くない。

社長にも、会長にも泣きじゃくるのに加藤にはきゅっきゅと笑顔を見せている。

そして、春日さんもまんざらではない様子で、母の顔というよりも、むしろ女の顔になっているように思えるのは俺のひがみ心から来るものだろうか。

ちびっこのトイレを済ませて手洗いをさせていると、そのちびっこのお母さんだと思われる女性が来て、

「てっきり、渡辺君が落とすのかと思っていたのに、残念だったわね」、

その子の服を直しながら小さな声で

「加藤君がプロポーズしたみたいよ」、

とても残念そうに教えてくれた。

そのあとの記憶はほとんどなくて・・・

「おい、お前その趣味あるのか?」、

その声にガンガンする頭を押さえて重い  
眼を開けると

「いいけど、俺たちだけどいいのか？」、

俺が加藤に抱き着いて・・・

知らないベッドの中にいた。

「ええええ！！」、

慌てて飛び起きて、気持ち悪くて口を  
朝得た俺の前にすかさずゴミ箱を出した  
加藤が

「ほんとに、酒癖悪いなお前・・・」、

呆れて俺の背中をさすっている。

「覚えてないんだろう？」、

そう言われて、ゴミ箱に顔お突っ込んだ  
まま頷くと

「春日さんの時もそうだろ？」、

こつんと頭を突かれた。

ゆっくりと顔を上げた俺に

「悪かったな、俺の兄貴の不始末で・・・」、

加藤が、意味の分か内事を言いながら頭を  
下げた。

加藤は、背中をさすりながらゆっくりと話を続けた。

「春日さんと兄貴は大学の同級生で、俺も紹介されたことがあるくらい中が良かった。

でも、兄貴はちょっと変わってて、ふらっと居なくなるんだ。

そして、気まぐれに絵葉書だけよこす。

そんなんだから、大学も中退して、ずっと海外で暮らしている。

春日さんも、居所は知らないみたいで、いつも探していた。

それがさ、去年、家にはがきが来たんだ。

”結婚した”って、書かれた教会の写真がさ。

驚いた母さんが、春日さんかと思って連絡しちゃったもんだから、そのまま春日さんはバリに向かって・・・

で、独りで帰って来た。」、

加藤の話は意味が分からなくて

「ふざけるな！」、

俺は加藤の胸ぐらを掴んでいた。

「それって、直輔の父親がお前の兄さんで、結婚してるって・・・」、

ふるふると、俺の手が震える。

「ああ・・・現地の女性と結婚していたらしい・・・」、

ゆっくりと胸ぐらを掴んでいる俺の手を外しながら

「春日さんが妊娠した事も、直輔が生まれた事も、兄貴は知らないし、言う気もない。春日さんが、それを望んでいないからな。」、

じっと俺の眼を見ながら

「兄貴の名前は・・・俊輔っていうんだ」、

とどめを刺した。



俺は加藤のベッドで天井を見上げている。

二日酔いの上に、重ねられて現実に耐えられずに、恥ずかしながら号泣して・・

加藤が、氷で頭と、目頭を冷やしてくれているんだ。

「渡辺の人生に、俺達家族を背負いこむ必要は無いと思う。お前には、探すべき相手がいる事も、春日さんから聞いている。

だから、これ以上深入りしないで、離れるべきだと思うんだ・・。

この先は、俺が直輔のそばにいるから・・」、

加藤の言う意味も分かる。

でも、突然のその言葉を受け入れられる事なんか出来ない俺は、ただ泣くしか出来なくて、そのままシーツの中に潜り込み声を上げ続けた。

「ば・・・ば・・・」、

つかまり立ちをしたまま、片手を伸ばそうとしてコテンっと転がり、周りの大人が大慌てをする。

「じじだよ～」、

そんな直輔を一番先に抱っこして得意気に笑っている社長と、それを呆れて見ている春日さん。

そして、俺の横には

「お父ちゃんの所においで～」、

と、加藤が手を伸ばして奪おうとしている。

これは、毎週末の光景。

仕事で疲れた日々を浄化してくれる唯一の楽しみであり、不思議な家族の団らん。

あれほど、くぎを刺された俺だけどやっぱり、直輔のそばを離れる事は出来なくて、仕事に支障の出ない週末にだけ、加藤と競い合って直輔と過ごしている。

春日さんは呆れながらも助けっっている  
ようで、好き勝手に遊びまわっている。

来週は、直輔の1歳の誕生日会。

これでいい・・・

このままで、いい。

俺は、心の奥深くにあの笑顔を封印して  
目の前の小さな歩みを応援すると決めたんだ。

あれから4回目の春。

加藤は泣く泣く海外の支社に旅立った。

俺は、専務の秘書（まだ、補欠だが）として、毎日を忙しくしている。

その専務は、去年の冬に、社長の娘である事を公表した、春日さんである。

直輔が4歳の誕生日に、春日さんから一通の封筒を渡された。

そこには探偵事務所の文字。

俺にはその中身を見なくても、アイツの事だと直ぐにわかった。

なぜなら、その数日前に

「俺のパートナーになってくれませんか」、

そう、春日さんに告げていたから。

「考えさせてくれる？」、

いつになく厳しい顔で答えた春日さんからの、難しい課題なのだと受け取った。

履歴書の顔写真から、その手の店に張り込んだと記された文章になにか、背筋がざわざわした。

考えてもみなかった。

アイツが俺以外の男たちのたむろすそんな場所にいるはずがあるものか・・・

そんな、怒りの様なものを感じながらその報告書を読み進めると

「近くじゃないか・・・」、

半年の張り込みの成果で、アイツを見つけたと書いてある。

見つかった事にも驚き・・・

そんな前から探していた？・・・

俺は、春日さんの行動にも驚いた。

毎週末になると、アイツが現れる小さなバーの名前と住所。

そして、カウンターでマスターと思われる男と笑う写真。

他にも、女かと思うような色気のある男と、体育会系のごつい男。

そして、高校生の様な少年。

何人かの男たちが優しくアイツをまるで守るように、笑っている。

報告書には、

”その店で、男との同伴または、お持ちかえりは一切なし。そして、他に交友関係もなし。会社と、自宅アパートと、その店の息抜きのみ。”

と、書かれていた。

それは、どう受け取ればいいんだ？

今でも俺の事を待っているのか？

それとも、もう恋はしないのか？

都合のいいことを考えてしまう俺は、その週末、春日さんの所にはいかずにアイツが現れるという、そのバーへと向かっていた。

数回の夜をその店が見えるカフェで過ごした俺の目の前に、二人は現れた。

普通の職業とは思えないいかにも芸能人とか、そういう関係の職業の雰囲気を出す綺麗な男が、とても大きなスーツケースを引っ張って歩いている。

肩から下げていた何か大事な物が入っているらしい鞆を大事そうに受け取ったアイツはとても嬉しそうにその隣を歩き・・・

時々、さらさらと髪を撫でられている。

すっと顔を寄せて耳元で何かを囁かれてアイツは頬を染める。

探偵が調査している間、きっと海外にでもいたんだろうその大きな荷物。

そうか、そいつを待っていたのか・・・

二人は、あのバーの中に入っていった。

もう、いいんじゃないか？

帰れ、もう、諦めろ！

そんな声が俺の中で響くのに、何故か立ち上れずに、その場所にとどまった。

もしかしたら、ただの知り合いかも

そうだ、駅で偶然会って、店まで来たのかもしれない・・・

お代わりをしたコーヒーを持つ手がカタカタと震えるけど

きっと独りで帰るはずさ、

いつもの様に・・・

「すみません閉店なんですけど・・・」、

申し訳なさそうに店員が声を掛けてきて壁の時計が1時になっていることを知った。

会計を終えて店を出ようとした時、あのバーの灯りが消えた。

次々に出てくる男たちの最後に、大きなスーツケースを引っ張って・・・



アイツが出てきた。

その後ろからは、少し千鳥脚のあの男。

そして、アイツの肩に手を回して歩き出す。

いつもとは逆の道を

時々、頬を寄せて・・・

二人はそこに待っていたタクシーに乗った。

慌てて路地のバイクに飛び乗った。

アイツと出かけるために取ったバイクの免許。そして、バイトで貯めた金で買ったこのバイク。

大学の卒業式の翌日に届いたものだからアイツは見たことが無い。

メットもふたつ

それは使われないまま、寮の棚に置いてある。

タクシーのテールランプが見えなくなる前に、俺はアクセルを回した。

タクシーはとても有名なホテルの前に滑り込んで止まった。

荷物が運ばれて、アイツはその男の手を取って、ゆっくりとホテルに入っていく。

そいつを深いソファーに座らせて、フロントへ向かったアイツはさらさと何かを書いて、カードキーを受け取ると

あの男の所になっこりと戻ってきて

二人はエレベーターの中へと消えた。

もういいだろう？

いや、送っただけかもしれないし・・・

チェックインできる仲だぞ？

昔からの知り合いなのかも・・・

何度も何回も、心の中で自問自答を繰り返し、気が付けばゆっくりと周囲が白くなっていく。

暗闇に紛れていた内は良かったが、姿が見えるようになると、俺のこの姿はかなり怪しいはずで

「何か御用ですか？」、

ホテルの周囲の清掃に出てきた職員がそう声を掛けてきた。

「あ、すみません・・・邪魔ですね」、

バイクをどかすために、またがると

「あなたも追っかけですか？」、

その職員はちらっと通用口の方を見て

「これから、どんどん増えますよ」、

そう言って、ちょっと面倒臭そうな顔をして、またゴミ拾いを始めた。

「あの？、今日、何かあるんですか？」、

そう聞き返した俺を、不思議そうに  
見ながら

「なんでも、引退間近かな俳優さんが  
写真集の撮影をするとか、女の子達が言っ  
てましたけど・・・」、

職員さんはそのままゴミ拾いを続けた。

撮影・・・

そうだ、あの男！、何かで見たことのある芸能人だとばかり思っていたけど、春日さんの所で見た、有名なカメラマンだ！。

春日さんの所には、いろんな世界のいろんな情報が並べてある。

どんな方との会話でも抜かりが無い様に、今の流行物について、若手№1の女性秘書が凄い情報量を準備している。

俺も、時間の許す限り、目を通し、春日さんがどのようにその情報を利用するのかを勉強している。

有名な写真家のM I S Uが、唯一認めたと紹介された記事。

そう、彼は人物写真家の

A M A N Eだ・・・。

「なんで、そんな有名人と・・・」、

空まで伸びるそのホテルを見上げ

そこで何をしているんだよ・・・

俺は、その場を動けなかった。

「なんて顔してるのよ・・・」、

日曜日の朝早く・・・俺はチャイムを  
押していた。

「おはようございます・・・」、

春日さんの腕の中から眠そうな天使  
が俺に向かってゆっくりと手を伸ばし

「ぱ～ぱっ」、

そう、呼ぶ声に思わず涙が溢れてきて

「俺・・・どうしたら・・・」、

天使を抱いた春日さんごとカー一杯に  
抱きしめた。

ふう～・・・

そんな俺の腕の中で大きな溜息をひと  
つ、ついた春日さんは、するりとそこから  
抜け出して

「とりあえず、朝ご飯作って!」、



スタスタと、リビングに戻って行った。

春日さんは、何があったの？、とか  
どうしたいの？、っとか、一斉聞かない。

俺に渡した書類の事も、聞かない。

いつもの厳しい上司の顔ではなく直輔  
の母としての優しい笑顔でそこにいる。

今日の前にあるのが、俺の現実であり  
俺を取り巻く人たちとの生活。

これを、愛” と、呼ぶのかは実際の  
ところ、誰にも分らないと思うのだが、  
俺の心には、直輔がいて・・・  
そう、春日さんがいる。

アイツの場所は、無くなる事はないの  
けど、これ以上もう、増える事は・・・  
増やすべきではないのかもしれない・・・

昨夜のアイツのあの笑顔が、全てを  
物語っているんじゃないのか？

アイツは、今・・・

幸せなんだ。

俺は、その笑顔を中心に押し込めて

「何が食べたいですか？」、

ソファで笑う二人に向かって最高の  
笑顔に向けた。

春日さんからの返事は無いまま・・・

俺も何も聞かないまま・・・

直輔は先月5歳になった。

俺は昨年末の移動で、古巣に戻って  
壱から営業を学んでいる。

自分よりも若い先輩について、外に  
出て、そして誰よりも遅くまで残業を  
して、周囲が心配するくらい我武者羅  
に働いている。

海外で頑張っている加藤に負けたく  
無いのもあるのだが、やっぱり、春日  
さんに・・・いや、周囲に認めて貰える  
男になりたいのもある。

何かを吹っ切る為・・・

それも、あったのは事実で

あの、カメラマンの話題に目を背け  
ないでいられる男になりたかった。

そんなある日曜日に、寝ぼけている俺の所に春日さんが何かをひらひらと揺らして来て寝ころんだ。

ぎゅっとその身体を抱きしめた俺の腕をするっと外して

「ねえ、今日これを見に行こう」、

そう言って揺らしたのは、あの・・あの、カメラマンの写真展のチケットだった。

断る理由を言えない俺は今、とても洒落たホールの前にいる。

もっと混んでいるのかと思っていたのにそこに人の列は無くて、俺はあたりを見回してしまう。

すると、春日さんがすたすたと10cmのヒールを鳴らしてそのホールに入って行ってしまふんだから、慌ててその後を追いかけた。

「いらっしゃいませ」、

スタッフ数人が春日さんそそばに来るとそのままチケットの確認も無いまま、奥の部屋に案内されて行く。

追いかけてきた俺に、ちらっと視線を向けると、春日さんの横にいたスタッフが俺にも案内をしてくれた。

で・・・

今、俺の目の前では、春日さんと

あの男が・・・

いや、写真家のAMANEさんが談笑している。

時々、そいつは俺に視線を寄こす。

ちらっと見たかと思うと、次は頭から

足先まで眺めたり、じっと口元を見たり  
中世的でいて、男っぽさもあり、でも、  
あの時、アイツの肩を抱いていたような  
色気も見えて・・・

こいつが、アイツを・・・

そんなことを思い、腿の上で握り拳を  
握ってしまった俺に

「俺、喧嘩は苦手だし・・・」、

そいつは、ふふふっとからかうように  
笑って、立ち上り

「ゆっくり、見ていくといいよ」、

そのまま部屋を出て行った。

その後姿に気を取られていた俺の拳を  
そっと包み込むように握りしめた春日さ  
んは

「独りで見てきなよ・・・」、

ぽいっと、俺の手を投げて珈琲カップ  
に手を伸ばした。

圧巻

感動

そんな言葉じゃない、もっとこう  
何だろう、心をわしづかみにされた様な  
切ない気持ちと、暖かさと・・・

世の中が、この男を取り上げる意味が  
とても良くわかる。

展示会前日の特別招待会と書かれた札  
の中に広がる空間はそこにいるすべての  
人達から言葉を奪い立ち止まらせている。

テレビでよく見る顔もあれば、町の中  
の普通の人達もいて・・・

どれも、笑顔ではないのに、優しい  
写真だった。

そして、一番奥のとても広い空間に

誰かはわからない夕暮れの横顔が

それは2枚組で・・・



頬に、今にも流れ落ちそうな涙が

そして、その優しい視線の先には  
今にもゆっくりと動き出しそうな小さな  
親子の姿が、ブランコにあった。

どちらも、淡いセピアで

わざとぼやけさせたような

でも、俺にはそれが

俺だけにはそれが、直輔を抱いた俺で

それを見つめる、アイツだと分かった。

どのくらいその写真の前にいたのだろう。

そして、どれだけ涙が流れたのか

窓から差し込んでいた日差しは、もう機械的な光となり、そこにいるのは俺だけになっていた。

「気が済んだかい？」、

後ろから聞こえた声に振り返ると AMANE さんが、さっきまでなかったはずのソファで眠そうにしている。

「あ、あの、俺・・・」、

そう言いかけたところを遮られて

「苦情は無しで頼むよ、一応母親に許可は貰ったんだし・・・」、

そう言われて

「はい？」、

意味が分からずに固まった。

「ふふ、聞いてないよね、やっぱりその展示許可を、赤ちゃんの母親に貰ったんだけどって言ったんだよ」、

立ち上がって俺に近づきながら

「父親じゃないって事かな？」、

今度はとても冷たい視線で俺を  
睨みつけた。

「俺、いい加減な男は沢山知ってるけど、その方が、他人を傷付けない事もあるってのも知ってる。いい奴ぶってる奴の方が、周りを沢山傷付けて、ほったらかしだからな」、

そのまま、ぐっと胸ぐらを掴まれて壁まで一気に押し付けられた。

2枚の写真の間に・・・

「この写真を撮ってから、俺はずっとこの子を見てきた。ずっとな・・・

今更、どの面下げて来てんだよ！

ホテルまでついてきたなら、なんで追いかけてきて奪わなかった！」、

その言葉に、今まで胸の奥に押し込んでいたものが写真のように次々と眼の前を横ぎる。

「馬鹿な探偵の雇い主が直だってわかったから泳がしといたが、あれから何年たってると思ってんだよ！」、

その声が響いたと同時に俺は冷たい床に崩れ落ち、左の頬に鈍痛が・・・

そして、口の中に血の味が広がった。



カツカツと離れていく靴の音と、コツコツと  
近寄ってくるヒールの音。

「大事な手を使ってまで殴りたかったって  
事だね・・・」、

春日さんは、こつんと俺の頭を叩くと

「そろそろ、解放するか」、

すっと俺の横にしゃがみ、耳打ちした。

「君は、私に手を出していません。ただ、  
酔いつぶれて、背格好に似ている誰かと  
勘違いして抱きしめて泣いていただけ」、

そして

「それでも私といたいの？どお？」、

春日さんは俺の返事を待たずに、そっと  
帰っていった。

放心状態で、ゆっくりと顔を上げる。

壁にもたれかかる俺の眼に、さっきまで  
気が付かなかったもう一枚の写真が優しく  
広がる。

見たことの無い笑顔の春日さんと・・・

直輔を抱いている知らない男。

知らない間に、涙が流れていた。

「そろそろ、鍵を閉めてもよろしいですか？」、

アイツの写真が見える床に大の字になって  
転がっている俺の頭上で、声がした。

春日さんが帰り、ポロポロと泣いてる俺の  
所にスタッフのタグをつけた女性がやって  
来て、

「好きなだけ、いてもらえ・・・と、伝言です」、

そう苦笑いをし、照明を弱めてスタッフルーム  
へと戻って行ったのは、かなり前だろう。

「すみません、遅くまで残らせて・・・」、

気が付けば俺のいた場所意外の電気が消えて  
いて、非常灯がぼんやりと光っている。

俺に声を掛けたスタッフは、起き上がった俺に  
くるっと背を向けて

「玄関は締まっているのであちらから・・・」、

そっけなく非常口を指さして、背中に回してた  
スタッフのタグを揺らして歩き出す。

マスクをしていたけど、さっきの女性スタッフ



とは違う人で、多分、男性で・・・

パタンと閉まったスタッフルームに向かって  
懐かしい香りが残っていた。

俺は非常口に向かって歩き出し、ドアノブを  
掴んでからもう一度、あの写真へと振る帰る。

そして、スタッフルームの覗き窓を見つめ

ゆっくりと暗闇の街へと戻った。

「なんで？、アタシが振られたみたいな事になってるんですけど？」、

いつもの店で、AMANEさんと盛り上がっている春日さんが、スマホを投げて立ち上った。

「まあまあ、そう言うことにしておけよ」、

めんどくさそうに、それを拾いながらAMANEさんの横では年配の渋い男が春日さんをなだめている。

「そうなるようにしてほしかったくせに」、

そんな春日さんにAMANEさんが舌打ちをするもんだから

「そんなことないわよ！、もうすぐ私がつんと振ってやるやる予定だったんだから！」、

春日さんは一気にジョッキを開けてそのジョッキに、自分でサーバーから継ぎ足し始めた。

店の前には、貸し切りの札が出ている。

” 春日さんすいません。

俺には、ずっと好きだった人がいます。

今でもずっと、心の中にいて

忘れられません。

春日さんとの時間は宝物だし、直輔も

春日さんも大好きだけど

俺、やっぱり

ごめんなさい。”

盛り上がり、揺れるテーブルの上で光る  
その画面は、お酒なのか、春日さんの涙  
なのか、ところどころ滲んでいた。

非常口から外に出て、どれくらいの時間が過ぎただろう。

直ぐ近くの自販機でコーヒーを買って一気飲みして、寝ぼけた頭をすっきりさせて

そして、新しくコーヒーを買う。

ミルクと砂糖が入った甘いやつと、、もしかしたら好みが変わっているかもしれないからと、微糖のやつを。

それをポケットに突っ込んで、俺はさっきの扉と、まさかの為に玄関もチェックして。

かシャン

開いたのは非常口で、そこから出てきたのはマスクをして、キャップを深くかぶったあのスタッフだ。

ピピピッと慣れた手つきで暗証パネルを操作して、俺のいる方に振り向いた。

ピタ・・

凍り付いたようにその場に固まったその人は見えていた瞳をゆっくりと下げて、そして

反対方向に向きを変えようとした。

「ご迷惑をおかけして・・・」、

そう声を掛けると、今度は中途半端に方向  
転換しかけたまま、固まって・・・

「変わらないな・・・」、

思わず、そのぎこちない姿に俺がそう言って  
近寄ると

「し、失礼します」、

今度は、ジタバタと逃げ出した。

そして、ガシャン！、

そこに止めてあった自転車にぶつかりその  
まま、自転車ごと転がった。

「大丈夫か？」、

抱き起こした俺の腕の中には、キャップの  
取れたさらさらな髪が揺れ、

掴んだその手が震えている。

そっと、耳からマスクのゴムを外し・・・

懐かしいその頬にそっと手を当てた。

「逢いたかった・・・」、

そのままぎゅっと抱きしめて

ゆっくりと唇を寄せたその時

「ば、僕、恋人いるから!」、

ドンッと俺を突き飛ばして、立ち上ると

ピピピPPP、すごい勢いで携帯画面を連打して

「あ、あ、あ、あまねさん!今どこ!!」、

そう言って走り出した。

俺もその後を追いかけて走り出す。

「ば、僕もそこに行くから!まって!」、

アイツが行ったその店の名前に心あたりがあった・・・

だから追いつきそうなのをあえて、その後を追いかけた。



いつもの店の一番奥の座敷で

俺は正座をさせられている。

べろんべろんに酔っばらった春日さんと  
文句の機関銃のAMANEさんと  
ニヤニヤと俺を眺めている不思議な人。

そして、遅れてやってきた和樹が俺の  
大事な人を慰めている。

アイツはAMANEさんが好きで、その  
AMANEさんは、怪しい中年のその人が  
好きで、その人は、浮気者で？、

春日さんは、どうやら俺の事が好きだった  
見たいで、アイツの事を色々調べていた  
らしいとか

酔っばらってるのをいいことに、なんだか  
良くわからないことになっている。

でも、時々アイツは俺を見てくれて

時々、昔みたいな嬉しそうな顔をする。

そのたびにAMANEさんが、だめ！！



「こいつはだめ！！」、

っとからんでくるから、なかなかアイツのそばには行けない。

もう一度、

アイツと二度目の恋を始めるのは

色々と、障害がありそうだけど・・・

こんなにたくさん遠回りをしたんだから

少しずつ

もう一度・・・

アイツに一番最初にあった あの日のように

恋をしよう・・・



頭が痛い。

今までに経験したことの無い激痛だ。

何度も何度も、何かで殴られている様な  
そんな激痛が走る。

なんで・・・

なにが・・・

ん？

デジャブーなんですけど・・・

まさか、また横に春日さんがいる？

鈍い頭痛と、激痛が交互にくる中、ゆっくり  
眼を開けると

「やっと起きたな！」、

やっぱり、そこに仁王立ちしていたのは  
春日さんで・・・

でも、服は着ているし、髪も乱れていない  
それに、寝起きとは思えないばっちりな化粧。

そして、驚いている俺の布団の中で何か  
もぞもぞと動いて・・・

え？・・・

恐ろしく久しぶりな感覚がむくむくっと  
湧き上がってくる。

「あ・・・」、

思わずおかしな声が出かかったその時

「こら！直輔、出て来なさい！」、

がぱっと布団をはがされた。

俺の足元でもぞもぞしていた直輔が

「えーもう少しネルうう・・・」、

って、更にしっかり抱き着いてくるから  
かわいい頭が俺のあそこでもそもそと  
それを刺激するから、もう、まじで  
やばい状態になっている。

「直輔、邪魔すんじゃない！」、

そう言って、直輔を引きはがした春日さ  
んは、ばふっと俺の大事なそのやばい・・・  
それを踏みつけて

「これから直輔と出かけてくるから、その間にさっさと終わらせて出っ行ってよ」、

そして、ぐりぐりともう一回踏み直して直輔を抱えて出て行った。

はい？

終わらせる？

意味が分からず踏まれた場所をもぞもぞ修正していると

もぞもぞ・・・

今度は背中で何かが動いた。

どうやら飲み過ぎたのは俺だけじゃなく  
春日さんの声の後に、AMANEさんと  
あの男の人の声がする。

勿論和樹の声もして、直輔が甘えている  
のも聞こえている。

ドアの音、  
鍵の音、

そして、静かになったマンションの中で  
聞こえているのは俺の背中 of 寝息だけ。

さっき、聞こえなかったのは

アイツの声。

懐かしいぬくもりは、俺を許した訳では  
ないにせよ

こうして、俺に甘えてくれている。

わかっているのかな・・・

起きたらどんな顔をするかな・・・

俺はゆっくりと体制を入れ替えて、数年  
ぶりのその笑顔をのぞいてみた。

相変わらずの無防備な寝顔。

そして誘うような唇。

大き目のシャツのから見える白い首筋。

ゆっくりと絡まる脚。

そして、

あの頃の俺が付けていた懐かしい香り。

抱きしめたいのを必死にこらえて、俺は  
その寝顔を見続ける。

その瞳が開いたら、

まずは何から話そうかな・・・

おしまい。





あとがき

---

何気に始まったコラボ企画が  
長くだらだらと続いてしまいまして  
すいませんでした。

アンハッピーで終わらせようと思い  
その方向で来たのですが、やっぱり  
この二人には、幸せになってもらわ  
ないと、って、仕切り直し。

グダグダだ～

でも、いいや。

満足（笑）

また、次の萌で

ぱら

二度目の恋を・・

<http://p.booklog.jp/book/123554>

著者 : palareru

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/palareru/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123554>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト